

はじめに

3月11日(日)、小野市うるおい交流館エクラ(以下、エクラ)の会議室においてパネルディスカッションを行なった。テーマは「ボランティアのあり方」。そこに集まったのは北播磨市民活動支援センター(以下、アルシェ)の実行委員会メンバーや理事・評議員の8名で、事務局からも2名がオブザーバーとして出席した。筆者はそのコーディネーターとしてアルシェから招かれたが、ここでは当日のダイジェストをお伝えすると同時に、そこで浮かび上がったアルシェを含む市民活動の現状と課題についてレポートしたい。

「ボランティアのあり方」

～箱舟の行く先～

アルシェの委員会、実行委員会のメンバーが語るボランティアの想い



「コーディネーター
プロフィール」

菅 祥明(すが よしあき)

1976年生まれ(31歳)

神戸市東灘区生まれ。大学生の頃、震災に遭う。

大学院では公害反対運動を専攻。

学生時代からボランティア団体の活動に携わり、

2004年4月からNPO法人 CS神戸でスタッフとして勤務を始める。

1. アルシェの「今」

神戸市内から高速道路に乗れば小野市までは約1時間。人口およそ5万人の小野市中心部にエクラがあり、その一帯には大型ショッピングセンターや田畑も広がっている。何にも増して大きな存在感のあるエクラを訪れる度に、市民参加型のまちづくりを目指す意気込みが感じられる。

平成17年3月にオープンしたエクラは、NPO法人北播磨市民活動支援センターが小野市の指定管理者制度に基づいて施設の管理運営を行なっている。NPO法人等による公的施設の管理運営はもはや珍しいことではないが、エクラほどの大規模な施設をハードも含めて管理運営するケースは稀であろう。エクラホール(500人収容)、ハートフルサロン、会議室、サークル室、スタジオ、ITコーナー、さらには直営の喫茶コーナーまで、まさしく「市民活動の拠点」としてハード面では望みうる最良の環境がここにはある。

P.5の組織図を見ると分かるように、アルシェの組織面の特徴は多種多様な企画・イベント等を担当する実行委員会の存在にある。多機能の施設がもつ強みを活かして、無償のボランティアが自分たちで企画した事業が基本的に独立採算制のもとで行なわれている。アルシェの立ち上げから関わる11名の評議員、理事12名、日常の業務に従事する職員42名、そして各種企画・イベントをボランティアとして担う6つの実行委員が41名という、施設と同じく大規模な人員で管理運営されていることが数字からも伺える(いずれも平成19年3月現在)。

2. 組織が抱える課題

さて、そのようなアルシェとはどのようなミッションで活動しているのだろうか。2004年に出された「アルシェ・レター」創刊号を見てみよう。そこで柳田吉亮さんが理事長挨拶として、「私たちの存在意義は、この「参画と協働」を実践できる



自立した市民活動団体の育成にあり、これは、まさしく時代の要求でもあります」と述べている。指定管理者制度という社会の要請が生み出したシステムのもと、アルシェとは施設の管理運営とともに、中間支援も行なうNPO法人であることが宣言されている。ここからアルシェが目指すものが見えて来る。

しかし先に述べたアルシェの組織概要は、人材と場所の確保に難渋する団体が見れば羨むばかりの環境かもしれないが、大きな施設・大きな組織を抱えるがゆえの課題もある。

パネルディスカッションが始まる前に筆者は事務局や広報委員の方々とすこし意見交換を行なったが、そこからもアルシェの現在抱える課題や不安が見えてきた。

- ボランティアを含めて全ての人と同じミッションや目的を共有しているだろうか?
- 組織内のコミュニケーションやヨコの連携は円滑に行なわれているだろうか?
- メンバーと事業が増えて互いの活動も見えにくくなっているのではないかと?

「アルシェ・レター」Vol.7には「平成18年度事業予算のあら

まし」が掲載されていて、それによるとアルシェの事業規模はおよそ1億7千万円である。人員・財政面ともに大規模なNPO法人であっても、やはりミッションの共有や意思疎通に問題意識を抱えているのだ。規模の大小に関わらず、もしかするとそれは非営利組織に共通する課題なのかもしれない。アルシェに限るなら、設立から4年が経過した今、組織やその活動を見直す転換点に差し掛かったとも言えるだろう。

そこで今回は、上記のようなテーマのもとにパネルディスカッションを実施し、意見交換を通じて課題解決の糸口を掴み、なおかつ今後の方向性についても議論を行なった。

3. メンバーの意識

それでは、実行委員や理事の皆さんはアルシェとその活動についてどのように考えておられるのだろうか。パネルディスカッションでの発言からそれらを見ていきたい。当日は本題に入る前に「他己紹介」を行なった。そこには、「現在の活動の課題は?」「あなたの活動満足度は?(%で記載)」という項目も入れておいた。ここでは出席者の横顔とその意識を少し見ておこう。(パネラーの紹介は次頁に掲載)

評議員でもあるHさんは課題として「例会の機能の難しさを感じていて、メンバー間のつながりをどうやって強くするかが課題です」「市民に認められるNPOとはどんなものか?」「この団体で自分は何が出来るのか、何が出来ているのか?」ということを挙げられた。

Gさんは副理事長も兼務。課題は「アルシェに関わる人がいかにすれば楽しく活動出来るか?」「活動の資金をどう捻出するか?」と言われ、苦悩の表情に深刻さが伝わってくる。

Mさんの目標は「シューベルティアーデの認知度アップ」で、それを通じて音楽好きの人が増えることを目指しておられる。さらにMさんは、中間支援団体によるサポートの必要性も感じておられるようだ

「他市他町への情報発信をいかにしていけば良いかが今

ひとつ分からない」と言われたのがNさん。

Sさんは「歴史に関わる事業で自分にできることがあれば何でもやっていきたい!」と熱く語られた。そこから視点を地域にも広げて「高齢の方の生きがいや、人生の楽しみとなればより自分自身もボランティア活動が楽しくなるのではないかと」という提案もされていた。

広報委員としてディスカッションの場におられたIさんも「アルシェ・レターを小野市以外にいかにも広めていくか?」「アルシェとエクラの違いをより明確に伝えていく必要がある」と話され、Oさんは「地域の方とボランティアとしてどう関わっていくか?」「北播磨という大きな地域に何をどう発信していけるかが課題です」。最後にKさんは「活動への利用者の少なさ」や「活動のサポーターから意見を聞く機会が少ない」ことを課題と考へておられる。

これだけを見ても、それぞれの方の問題意識は次のように分類することが出来るだろう。

- 自分たちの活動が地域で認知されているかよく分からない
- 活動にはどのような関わり方が最も良いのか?
- いかにかすれば活動を継続させられるか?
- メンバー間のコミュニケーションが十分に行なわれていない

主にこの4点にまとめられる。

参考までに他己紹介で示された活動満足度も紹介しておこう。活動満足度の最も高かった方で80%、逆に最も低かった方では40%と、平均の活動満足度は61%という結果となった。様々な立場の方がおられるので一概には言えないが、筆者の予想よりもやや低かった。「自分自身のエネルギー不足が課題です」(Fさん)や「いかにノーと言えぬかが私の課題です」(Hさん)と話される方もおられた。それらの発